

# 大学生を対象とした雨の捉え方に関する研究

徳島大学・都市デザイン研究室 学生会員 ○阿部生  
 正会員 尾野薫  
 徳島大学大学院 正会員 山中英生

## 1. 研究背景

これまで雨の現象に関する研究としては、大気環境を解明するために気象学的に扱った研究がある。また、人文社会科学での文化的・社会的意味を捉える研究や、工学での雨水の制御や処理という、気象現象を制御するなどの研究は数多くされてきている。こういった雨を制御するといった工学的視点の研究から、雨の持つ風景的効果を利用・活用するといった景観工学的視点からの研究を進めていく必要があると考えた。

また、日本人の雨の捉え方として、400以上に及ぶ雨の言葉がある [1]。このことから日本人が雨を細やかにとらえる鋭い感覚を有していることが分かる。水墨画・浮世絵などの雨の作品も多くあり、このことは雨がもつ風景的効果を示している。一方、現代では都市整備の中で自然と接する機会が減少しており、雨の言葉の消失や雨に対するイメージが変化していることが考えられる。そこで、これまで日本人が有していた雨の捉え方はどうなったかを調査する必要があると考えた。

## 2. 研究目的

雨という現象を人はどのように捉えているかを明らかにする。現代における人の雨の捉え方を明らかにする。

## 3. 先行研究の整理

小林享の気象景観体験における感覚印象操作の可能性に関する考察 [2]では、気象景観体験について、気象景観把握モデルを用い、主体（身体）と景観対象との空間的関係を、また、感覚の働きの考察により、五感による体験の動態と認識の過程を説明し、その内容を基本フレームとして気象景観の操作が可能であることを示した。

## 4. 実験方法

実験の対象は徳島大学の学生とし、1グループ4人の、計10グループ、40名に対し実験を行なった。

本研究では雨の状態として、雨がふるまえ・雨宿り・雨上がりの3種類を挙げ、それぞれに対してのイメージを調査する。調査方法としては記述描画調査と対話調査の二つの方法を用いる。また、調査により得られた結果を都市部・地方部、男・女などで分け、個人属性による違いも考察する。

雨の捉え方に関するアンケート

● 年齢 21才

● 居住経歴 本松山 0~18 4松島市 18~

例 0~18才 ○黒○市  
18才~ ○黒○市

1. 「雨が降る前・降り始め」をどのようなことで感じますか？  
 当てはまるものは口にチェックをして( )内に詳細を書いてください。  
 また、室内・室外、または両方のどこで感じるかに○をしてください。

例 雲の種類 (低い雲が重れ込んでいる) 室内・室外 (両方)

風が強さ (窓が揺れる、予きま風が吹く) 室内・室外 (両方)

他人の様子 (傘を待つ、上を見上げる) 室内・室外 (両方)

雲の種類 (積乱雲、うろく雲)	室内・室外 (両方)	温度 (高い)	室内・室外 (両方)
雲の位置 (空高い)	室内・室外 (両方)	気温 (高い)	室内・室外 (両方)
雲の色 (灰色)	室内・室外 (両方)	気圧 (低い)	室内・室外 (両方)
明暗 (明暗)	室内・室外 (両方)	湿度 (高い)	室内・室外 (両方)
川の水量 (多い)	室内・室外 (両方)	湿度 (高い)	室内・室外 (両方)
川の水音 ( )	室内・室外 (両方)	気だるさ (低い)	室内・室外 (両方)
雷の音 (ゴゴゴ)	室内・室外 (両方)	古傷の痛み ( )	室内・室外 (両方)
雷の光 (ピカ)	室内・室外 (両方)	他人の様子 (かた)	室内・室外 (両方)
風の強さ (強い)	室内・室外 (両方)	動物の行動 (おぼろ)	室内・室外 (両方)
風向き ( )	室内・室外 (両方)	でてる坊主 ( )	室内・室外 (両方)
風の温度 (つめたい)	室内・室外 (両方)	雨の最初の粒 (小さい)	室内・室外 (両方)
山の感じ ( )	室内・室外 (両方)	窓の水漬 ( )	室内・室外 (両方)
海の感じ ( )	室内・室外 (両方)	水面の波紋 ( )	室内・室外 (両方)
山・海・雲の関係 ( )	室内・室外 (両方)	屋根に当たる雨 (多い)	室内・室外 (両方)
匂い (雨の匂い)	室内・室外 (両方)	音 ( )	室内・室外 (両方)

他にも自由に書いてください。

図1 アンケート一枚目の回答例

3. 雨上がりに関して思い出風景をできるだけ詳細に絵と文章で書いてください。

雲が落ちて、雨上がり。雨の音が静かになっていく。空が少し青くなっている。歩行者が傘をたたき、歩いている。歩行者の足音に合わせたように、雨の音も少しづつ弱くなっていく。

図2 アンケート二・三枚目の回答例

### 5. 分析方法

調査用紙一枚目の分析は、回答者が各項目をどの五感で捉えているかを判断し、完成した表と回答者の個人属性を照らし合わせ、個人属性による違いを明らかにする。調査用紙二枚目・三枚目の分析は、自由記述によって書かれた絵の内容を構造化し捉える[3]。「東関紀行」の分析を通じた動的風景記述モデルの構築 [4] を参考に、対話の流れを時系列に沿ってまとめ、矢印などの記号を用いて対話内容のそれぞれの関係性を見る。また好悪のイメージによって色分けし、五感の分類も行なう。

### 6. 結果

雨がふるまえの捉え方として、聴覚に関しては、地方部のほうが都市部より強く捉えており、嗅覚に関しては、都市部のほうが地方部より強く捉える傾向があるということが分かった。男・女の捉え方の違いで分かったことは、聴覚に関しては、男性の方が女性より捉える傾向が強いこと。また、触覚に関しては、女性のほうが男性より捉える傾向が強いことが分かった。

雨宿りの捉え方として、雨宿りの場所のイメージで、地方部では建物の軒下が多く、都市部ではバス停が多いこと、男性は屋内のイメージが多く、女性は屋外のイメージが多いことが分かった。

雨上がりの捉え方として、地方部では雨上がりを山で捉える傾向が強いことが分かり、一方、都市部では雨上がりを地面の様子によって捉える傾向が強いことが分かった。雨上がりで描かれた場所として、男性は空のみ・地面のみの割合が高い一方で、女性は空と山・空と地面などの割合が高く、様々な要因を複合して雨上がりを捉える傾向が強いことが分かる。

描画調査と対話調査を対応させると、描画調査では視覚の情報が豊富に得られたが、他の感覚の情報はほとんど得られなかった。一方、対話調査では視覚以外の感覚の情報も比較的多く得られた。また、対話調査の中では記述描画調査で得られなかった、新しいイメージが出現することもあったため、両方の方法を用いて調査を行なう必要がある。

### 7. 結論と今後の課題

大学生を対象とした雨の捉え方と共に、都市部・地方部、男・女による違いを明らかにした。

対話調査により記述描画調査では得られなかった新たなイメージを出現させ分析対象を増加させることが出来たため、個人と集団の両方の調査を行なうことが必要である。

今後の展開として、年齢による捉え方の違いの調査や分析方法の精度の向上を目指す。

### 8. 参考文献

- [1] 高橋順子, 雨の名前, 小学館, 2001.
- [2] 小林享, “気象景観体験における感覚印象操作の可能性に関する考察”.
- [3] 堀繁 栗原正夫 篠原修, “体験された風景の構造,” 造園雑誌, 1988.
- [4] 吉村晶子, “「東関紀行」の分析を通じた動的風景記述モデルの構築,” 1998.

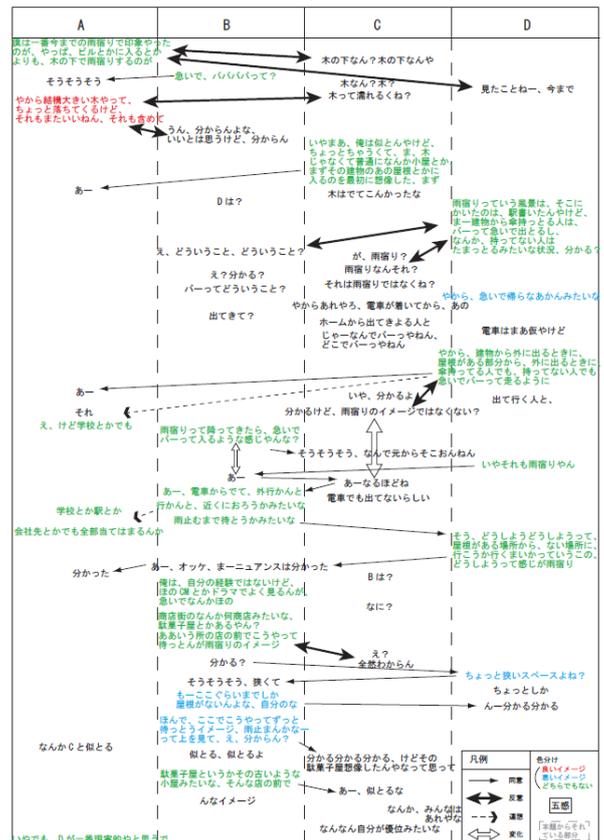


図3 対話調査の分析例